都市居住文化の創造へ
―近世大坂の町家・長屋に学ぶ視点

◆◆◆◆◆◆ written by Yukari Hiromoto 弘本 由香里

はじめに

都市の住まい方や集合住宅の住まい方を考える際、日本人のモラルやセンスの乏しさが指摘されることが多い。事実、持ち家の居住水準（平均面積）こそ一定レベルに到達しているものの、住まい方や町並み景観という面では、決して豊かとは言い難く、むしろ住環境や住生活は貧しいと言っても過言ではない現状がある。

筆者は、一九九八年以降、大学（立命館大学政策科学部）で講義を受け持つ際、受講生に「あなたにとっての原風景は？」というアンケートを行っている。そこで出てくる答えの多くは、大都市近郊に拓かれた職住分離のベッドタウンの風景や、地方都市の郊外風景である。二〇歳前後の彼らの心象風景の中に、職住遊が近接した都市的な暮らしぶりを感じさせるものは、ほとんど現れてこないのである。

乱暴な言い方をすれば、戦後、特に高度経済成長以後、都市はもっぱら経済活動を主軸に開発され、生活文化の舞台としての都市の成熟は疎外され続けてきた。その結果、多くの日本人の心象風景の中から、かつて存在した都市に住み・暮らす文化や、その記憶は消し去られてしまったのではないだろうか。学生たちの反応は、そのことを如実に物語っているように思えてならない。

また、日本の都市は経済の拡大とともに、スプロール的に周辺地域を開発しながら拡大してきた。そのため、物理的にも文化的にも、都市という明快な輪郭が曖昧に拡散し、個性のない空間が広がり続けることになった。いわゆる「都市化」という言葉が、『洗練』というニュアンスよりも、『破壊』というニュアンスで語られることが多いのも、そのあたりに原因がありそうである。

そうした都市の拡大が、今、環境負荷の低減や少子高齢社会における都市経営、低成長経済と財政緊縮、あるいは地域文化の活性化といった観点から見直しを迫られている。現在、政府の主要政策に掲げられている都市再生も、そのひとつであろう。しかし、真に市民の豊かな暮らしの舞台としての都市再生を導くには、まず日本における都市居住の記憶を回復し、かつて展開されていた都市に住

み・暮らす文化とは、どのようなシステムによって成立していたのかを検証する必要があるだろう。いったん断絶した歴史の糸・記憶の糸をつなぎなおし、先達の知恵に学びつつ、これからの都市居住文化を創造していく新たなシステムを構築すること。そのプロセスは、都市における文化の連続性を回復し、アイデンティティを再構築していくうえでも、決して疎かにできないものだろう。

都市居住とは何か

そこで、そもそも都市居住とはどういう性格のものか、大まかに捉えておきたい。

都市の対極にあったのが農村である。農村生活者は、農耕を生業とし、その生業を中心に強い血縁・地縁的共同性の中で定住型の生活を構築してきた。当然その住まいとして形作られた農家は、農耕・定住型の生産活動を受け止める器として構成されている。同時に、その器は、狭い意味での衣食住を支える場としてだけでなく、定住を精神的に位置づける意味で、世代を超えて大地と祖先につながるための媒体でもあった。

一方で都市生活者は、商工業を生業とし、経済活動を中心にした結びつきの中で、流動性の高い生活を構築してきた。その住まいとして形成された町家は、農家とは対照的に、商いを軸にした暮らしを受け止める器として構成されている。商売の種類や大きさにあわせて、時々にふさわしい器としての町家や地域を選びながら暮らしを立てていく。農村と決定的に異なる流動性の高いコミュニティを、いかに良好に運営していくかが都市居住の課題である。その課題に応えるために町家には、町と都市生活者を結ぶさまざまな機能が盛り込まれ、都市に住み、暮らす文化を創造していったのである。

都市と農村のコスモロジーが明確であった時代は、上記のように、それぞれの住まいと暮らしに明らかな違いが存在した。ところが、日本における明治以降の急激な近代化と、戦後の秩序を欠いた都市の拡大は、近世に長い時間をかけてじっくりと形成された自律的な都市居住のシステムを省みなかった。先達の蓄積を生かすことなく、結果として、都市に暮らすルールもセンスも再構築し得なかったのではないか。

町家に見られる、商いのために通りに対して限られた間口を接して軒を連ねた、奥行きの長い、いわゆる「鰻の寝床」と呼ばれる特有の配置。方位が家屋の配置を決定づけることはなく、通りとの関係によって決定される町家。それに対して、南面に作業スペースとしての庭をとる農家特有の配置には、強い方位性が存在する。町家の形成史に詳しい大場修氏（京都府立大学教授）は、現在の日本人の多くが住戸の南面性にこだわる点にふれて「農村的なメンタリティーを引きずったまま都市生活者として暮らしているためではないか」という見方を支持している（大阪市立住まい情報センターセミナーにて）。

南面性へのこだわりの問題は、農村生活者と都市生活者との住まいや、住意識のズレを象徴する事象の一つであろう。近代以降、特に都市が拡大した戦後、大量に都市に流入してきた生活者の多くは、無意識のうちに農村的居住観を抱えたまま、都市生活者としてのアイデンティティを獲得することもできないまま暮らしてきたのではないだろうか。

ところで、二〇〇一年四月、「大阪市立住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）」がオープンした（大阪市北区天神橋六丁目、大阪市立住まい情報センター内）。近世から近代にかけて大阪に花開いた都市居住の歴史・文化を体感することのできる施設である。同ミュージアムの開設の趣旨について、館長の谷直樹氏（大阪市立大学教授）は、「都心での居住を進めるためには、住宅の高層化やコミュニティの問題など、集まって住むことを前提とした住宅計画と、成熟した生活文化の構築が不可欠になる。こういう問題を解決するために、これまでは海外の先進事例に範を求めてきたが、このあたりで自らの歴史や文化に問いかけ、日本型の都市居住の再構築に取り組む必要があるのではないだろうか」と述べている（『大阪市立住まいのミュージアム図録』から）。たまたま筆者は、「大阪市立住まい情報センター」並びに「住まいのミュージアム」の開設に関わる機会を得ることができた。谷

館長はじめ同ミュージアムの展示企画・監修にあたった方々の知見にふれる中で学んだ事柄をベースに、かつて大阪に花開いた都市居住文化が、どのような特性によって成り立っていたか、そしてこれからの都市居住文化創造のために何を学ぶことができるか、いくつかの視点から眺めてみたい。

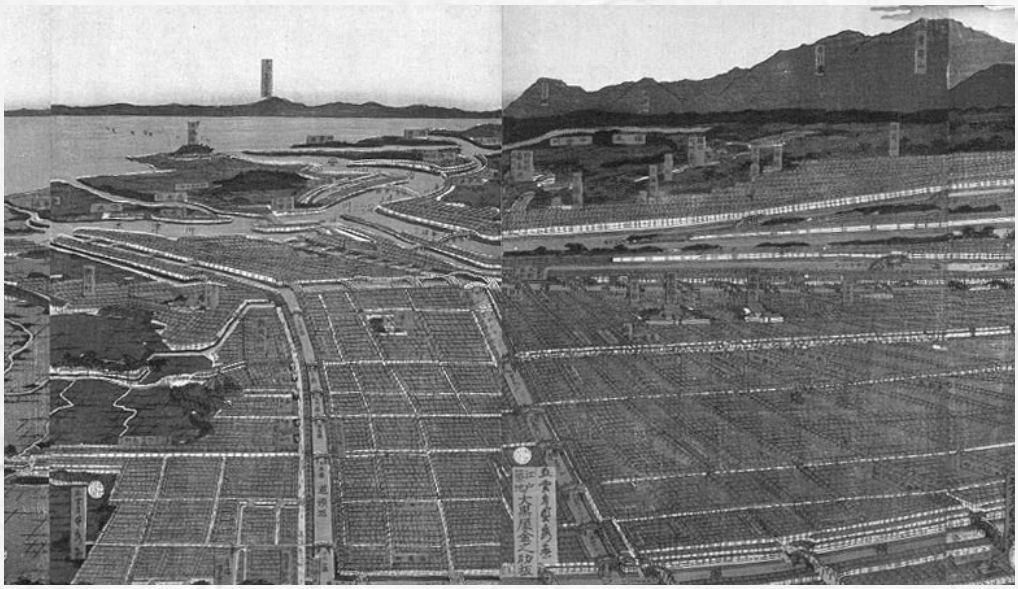
近世大坂の町と町家について

まず、大阪の町と町家について概観しておこう。近世に経済の中心として発展した大坂の原型は、豊臣秀吉の大坂築城に遡ることができる。ただし、豊臣時代の城下町は大坂夏の陣で焼失し、その後、徳川幕府による復興によって、現在の大阪の中心部にあたる大坂三郷（北、南、天満）が、当時の大坂の市街地として形成された。その後、近世末期に至るまで、幾度も大火による町並みの焼失を経ながらも、質の高い町家による統一された町並みを形作っていったのである。

各町は、通りとその両側に並ぶ家々が町の単位となる、いわゆる両側町として構成されていた。また、町の入り口には木戸門が設けられ、夜間には閉じられていた。町ごとに「町定（ちょうさだめ）」に基づいて、防犯・防災・防火をはじめ、清掃・し尿処理・道路や橋の管理・町並み規制・職業規制等々、幅広い自治管理が行われていたのである。そうした町の自治の拠点が、町の共有施設である「町会所」であった。町の自治組織に正式に参加できたのは、家持ちと呼ばれる持ち家層だけではあったが、ある意味で現代よりもずっと高度な自治管理が行われていた。

町を構成する町家は、厳密には職住一体型の住まいの形態を持つもので、通りに間口を接し、表側に商いのための店の間があり、奥に向かって中の間・座敷などの部屋が続き、裏に「前栽（せんざい）」と呼ばれる庭や土蔵がある。また入り口から裏まで「通り庭」と呼ばれる土間が通っており、店の間に付いている店庭と、中戸を境に奥の台所庭とに分かれていた。通り庭は、奥にある便所の汲み取りや、荷物の出し入れの通路としても使われた。ちなみに、家々の土蔵が敷地の奥に並ぶことで、火災の際には町の延焼を食い止める防火帯にもなっていた。

近世大坂では、各町の入口に木戸門が設けられ、夜間は閉じられた
（写真は住まいのミュージアム内大坂町三丁目の木戸門）


五雲亭貞秀筆「大坂名所一覧」9枚続きの鳥瞰図式風景画の一部（大阪市立住まいのミュージアム蔵）
町家で構成された近世大坂の町並みがよく分かる

商いの町・大坂では借家の比率が高く、元禄時代の記録でも八割以上が借家住まいであったという。借家人は決して路地裏の、いわゆる裏長屋の居住者だけではなく、表通りで大きな商売をする借家人が多数派として存在していたのである。そのために、表通りに面して、数多くの長屋建ての町家としての借家が並び、その裏に小さな裏長屋が並んでいたのである。

実は、近世大坂の高い借家比率と長屋住まいの文化は、そのまま近代の大阪に引き継がれ、戦前まで約九割に上る借家率を記録していた。都市生活者の暮らしを支える良質の借家としての近代長屋が、大量に生み出されていたのである。しかし、その長屋文化も、戦災と戦後の、都心から周辺都市への人々の大量転出によって、一部に名残をとどめつつ大半は消失していった。

幕末の大坂の町を鳥瞰した風景画、五雲亭貞秀筆「大坂名所一覧」を見ると、画面一面に碁盤目状の市街地が広がり、町家の瓦屋根が碁盤の目を埋めるように規則正しく並んでいる様に圧倒される。町人の町・大坂は、空間的にも八割以上が町人地であり、町人の住まい・町家で構成された町だったのである。そこに見られた特性のいくつかをあげてみたい。

住戸内に組み込まれたオープンスペースともいえる土間空間「通り庭」（写真は住まいのミュージアム内大店の台所庭部分）

プライベートとパブリックの共存

町家のもっとも大きな特徴は、不特定多数に開かれたパブリックスペースとしての店の間と、プライベートな生活空間が共存している点である。前掲の大場修氏は、町家において、住戸内の土間空間を「庭」と呼んでいる点や、通り庭と部屋の境の戸が、屋外との境に設ける雨戸の形状を残している点に着目し、そもそもは外部空間であった庭を、建物が建て詰まっていく中で住戸内に内部化したのが「通り庭」ではないかと指摘している。つまり、町家の通り庭は、屋内にあってもオープンスペースとしての意識を持った空間であるというのである。

「ばったり床机」を降ろして軒下に店を広げる、商品陳列の賑やかさは大坂の特色でもあった（写真は住まいのミュージアム内人形屋の店先）

軒下空間の帰属も、現代の住宅と近世の町家では異なる。近世の町家では、軒下はパブリックスペースであった。「ばったり床几」を降ろし、軒下まで店を広げて商いをするが、そこは本来、誰でも立ち入ることのできる公道の一部とされていた。

通り庭にしろ、軒下にしろ、住まいと町の接点が極めてファジーに設定されているところに注目したい。ファジーな設定によって、住まいと町が相互浸透し、プライベートな生活の一部に、常にパブリックな意識が作用する役割を果たしていたと見ることができる。

その町家の特性が、流動性が高くコントロールしにくい都市コミュニティにおいて、生活者と住まいと町をつなぐ意識、都市生活に求められる一定のモラルを育んでいったのではないだろうか。

借家人による住空間コーディネイト

近世大坂の大半が借家人であり、その住まい兼商いの場として、長屋建ての町家が大量に供給されていたことは先に述べたとおりである。こうした借家文化・長屋文化を合理的に支える仕組みとして大坂で発展したのが、室内の畳や建具を付けずに住戸を貸す独特の賃貸システム「裸貸（はだかがし）」である。

元禄年間に大坂を訪れたドイツ人・ケンペルは、『江戸参府旅行日記』で、大坂の町の様子を細かく観察し記録に留めている。その中の一つに「畳や戸や襖は同じ大きさで、長さが一間、幅は半間あり、すべての部屋のみならず家そのものも、畳の大きさや状態や寸法に従って造られ、そして建てられている」ことに着目している。

これは、柱の芯から芯までの長さを基準とする柱割の設計でなく、畳の大きさ（すなわち柱の内法）を基準とする畳割の設計が、大坂では一般的であることを物語っている。畳割を採用することによって、畳はもちろんのこと、障子や襖をはじめとする各種の建具や天井板などまで、住宅内部の部材が規格化され、互換性が生まれた。互換性が生まれるとともに、部材の製造や流通そのものが活発になっていったのである。

こうした互換性のある規格と商品の普及を背景に、大坂ならではの賃貸システムとして発展していったのが、裸貸というわけである。借家人が圧倒的多数である大坂では、町家を借りて商売をする際に、借家人自らが自分の商売や趣味に合った家具や建具を購入する方が理にかなっている。こうした需要に応えるために、戸障子・襖・屏風・衝立・欄間・引手・釘隠・表具等々、大量生産品からオーダーメイドの高級品、あるいは中古品まで、各種建具類を取り扱う店が軒を連ね、大坂以外の土地から買い求めに来るものも多かったという。

畳や建具を付けずに住戸を貸す「裸貸」の長屋。かまども借家人が持ち込む（写真は住まいのミュージアム内裏長屋の空住戸）

裸貸のシステムと、それを支えた住関連産業の発展によって、当時の大坂では、借家人が自由に自分の住空間をコーディネイトすることができていたのである。つまり、家持ちに限らず町に暮らす誰もが、それぞれの経済力の範囲でこそあれ、自分なりにインテリアコーディネイターとしてのセンスを磨き、自己表現する機会を得ることができたのである。裸貸によって誘発される個々の営みが、都市の活性化や創造性の向上にもたらす効果は、図り知れないものがあるのではないだろうか。

重層的コミュニティとソーシャルミックス

先に述べたとおり、近世大坂で直接的に町の自治にあたったのは、家持ち層の町人たちであった。すべての住民に開かれた自治ではなかった。しかし、町年寄を筆頭に家持ちで構成された町の自治組織だけが、コミュニティの営みのすべてを支配していたわけではない。

例えば、町内の御地蔵さんや御稲荷さんなど身近な信仰を中心にしたコミュニティ、天神祭など祭を中心にした氏子のコミュニティ、檀家寺を中心にしたコミュニティ、同業者同

士のコミュニティ等々。いわば数々のテーマコミュニティとそれぞれの活動への参加を通して、借家人たちも生活のいずれかの場面で確実に町につながっていたものと思われる。

一例だが、天神祭の際には、沿道の町家は幔幕を張り、高張提灯を掲げ、店の間の格子を取りはずし、通りに対して住まいを開け放ち、家宝の屏風や商売物一式でユニークな人形などを作り（造り物）、競って飾った。祭という非日常の空間演出を、町家と町が一体になって作り上げるのである。町家の表構えは、祭のしつらいにも対応できる仕様となっていた。通りに面して圧倒的な数で軒を並べる表長屋の借家人も、家持ちの家宝に負けず、趣向を凝らした演出をしていたことだろう。裏長屋の軒先にも祭提灯が下がり、こぞって祭見物に繰り出していたに違いない。

表通りに面した、家持ちの戸建ての町家と借家人の表長屋、そして路地の奥にある裏長屋。裏長屋から表長屋へのサクセスストーリーもあれば、その逆もある。住まいの階層性が同じ町内に重層的にミックスされていることによって、都市の流動性を受け止めながらコミュニティの健全性と活力を維持していく。都市再生に向けて、それらの知恵に学ぶべき点は多そうである。

高張提灯を掲げ、幔幕を張り巡らした、近世大坂の天神祭の町並み（写真は住まいのミュージアム内大坂三丁目大通り）

おわりに

近世大坂の町家・長屋文化を中心に、都市居住を支えるシステムの特徴をいくつかのポイントからごく簡単に眺めてみた。いうまでもなく、近世大坂がすべてにおいて優れた社会だったというわけではない。もちろん、現代の方が優れていることも多々あろう。そのことを承知したうえで、自律的な都市居住文化を再構築するための視点を、歴史・文化の連続性の中に探ってみたものである。都市再生を実のあるものにしていくためにも、専門家の知見に学びつつ問いを重ねていきたい。

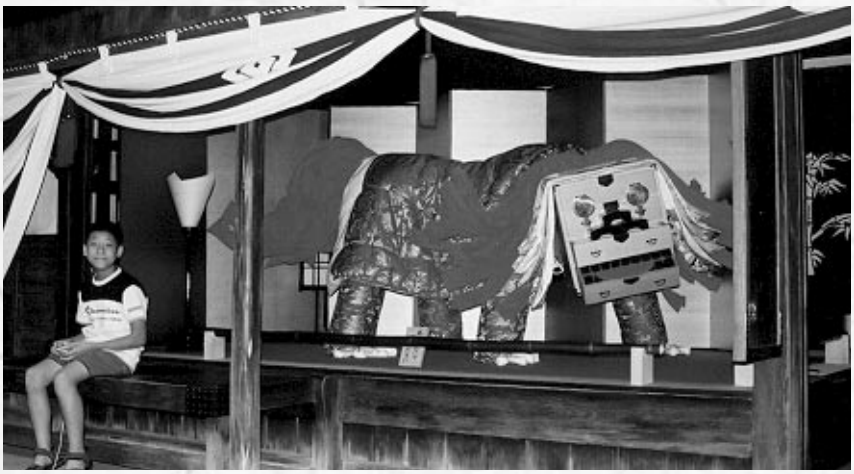
（大阪ガス エネルギー・文化研究所 客員研究員）

■参考文献

●『住まいのかたち　暮らしのならい　大阪市立住まいのミュージアム図録』（大阪市立住まいのミュージアム編、二〇〇一年三月）

●「個性的景観を生み出すもの　近世大坂の町並みに見る」（増井正哉、季刊誌ＣＥＬ五七号、二〇〇一年六月）

●『まちに住まう・大阪都市住宅史』（大阪市都市住宅史編集委員会、平凡社、一九八九年八月）



天神祭には店の間を開け放ち、商品で作った人形や家宝の屏風などを飾った（写真は住まいのミュージアム内の嫁入道具でつくった獅子）